



Title	幼稚園等での挨拶「先生さようなら、みなさんさようなら」のメロディーとその地域差：近畿の京阪式アクセント圏内の分布と現代の全国的画一化傾向
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

幼稚園等での挨拶「先生さようなら、みなさんさようなら」 のメロディーとその地域差

—近畿の京阪式アクセント圏内の分布と現代の全国的画一化傾向—

郡 史郎

要旨 幼稚園等でおこなわれる詠唱的な挨拶「先生さようなら、みなさんさようなら」について、特に「さようなら」部分のメロディーに近畿の京阪式アクセント圏内だけでも地域差があつたことを指摘し、その実態を 1950 年から 1975 年までの生まれの世代の状況を中心に検討し、地域差の成立経緯について考察した。実地調査の結果、この世代では地域の西部に〔サヨ〕と〔ラ〕が高いメロディーがあり、大阪市や京都市を含む東部には〔サ〕の直後で下げるあと〔ナ〕を高めるメロディーが分布する。そのうち〔サヨ〕が高いメロディーが京阪式として本来の言いかたであり、〔サ〕の直後で下げるタイプは、かつてよく使われた頭高型アクセントの間投表現「さいな」が混じって京都でできた比較的あたらしい言いかただと考えた。この新形は大阪の摂津・河内地域や奈良県北部、滋賀県方面には伝わったが、摂津・河内と和泉との境界や大阪・兵庫の県境を越えることはできなかつた。しかし、2000 年以降の生まれの世代では摂津・河内でも〔サヨ〕と〔ラ〕が高い言いかたが増えており、京都市にもその傾向が見える。ただ、これは京阪式アクセントとしての本来のメロディーが復活したものではなく、東京式の言いかたをもとにしながら、〔ラ〕を高くすることで別れの気持ちを強調すると同時に、〔ラ〕の高さをきわだたせて声をそろえやすくすべく直前の〔ナ〕を下げる言いかたと考えうるメロディーが現在全国に増えていることを踏まえると、その京阪式アクセント版として生じたものではないかという見方を示した。

1 はじめに

幼稚園あるいは保育所で降園直前に園児が先生と声をそろえて唱える儀礼的な挨拶は全国一般に「先生さようなら、みなさんさようなら」だ¹。「さようなら」の部分でお辞儀をすること

1 この挨拶は昭和 30 年代の前半には幼稚園等でやっていたが、それ以前については確認できていない。全国一般にやっているということは、それが決まりのようになっているということだが、その具体的な指示が書かれた公的資料は今のところ見つけることができない。現代保育の原点とされる文部省(1956)『保育要領—幼児教育の手びき—』には「五 幼児の一日の生活」の「幼稚園の一日」の項に「帰りじたく一保育室に入り、みんなそろって「さようなら」の歌などを歌い、家庭への通知や連絡帳、持ち帰るべき製作品等を渡し、あすの予定事項があれば話して、弁当箱・帽子・オーバー等を忘れないように持たせる。母親が迎えに来たら、その日のできごと、注意すべきことを話す。」とあり、歌についての言及はあるが、挨拶には触れられていない。その改訂版である文部省(1956)には「第 II 章 幼稚園教育の内容」の「2 社会」「(2)望ましい経験」「3. きまりを守る」の項には「幼稚園に来たとき、帰るときにあいさつをする。」とある程度。

幼稚園等ではこの挨拶に先立つて『おかえりのうた』が歌われることがよくあるようだ。この歌が楽譜として最初に出版されたのは戸倉ハル・天野蝶・一宮道子(1948)と思われる。前述の文部省『保育要領』と同年の刊行なので、『保育要領』にある「『さようなら』の歌など」というのはこの歌を念頭においたものかもしれない。この楽譜には作詞と作曲の分担が書かれていがないが、1897 年生まれで京都市生育の一宮道子氏が作曲したものと思われる(長尾智絵 2017)。

この歌の歌詞には 1 番の最後に「先生さよなら」があり、2 番の最後に「みなさんさよなら」がある。

が多い。小学校低学年でもやることがあるが、以下ではこれを“幼稚園等”での詠唱的な別れの挨拶と呼ぶ。「さようなら」の部分は「さよなら」だったという人もいるが、それも含める。

この挨拶のメロディーには地域差がある。本稿は近畿地方の京阪式アクセント圏内、特に大阪市と京都市を中心とする近畿地方中央部の状況を考察の主な対象とするが、興味深いのはこの地域に生育した人でも特に「さようなら」の部分に複数のメロディーがあり、そこに地域差が認められることである。具体的には〔サヨー|ナ|ヲ〕と〔サ|ヨー|チ|ヲ〕の2種類が圧倒的に多い。後者には変種として短い〔サ|ヨ|チ|ヲ〕もある。なお、ここでは相対的な高低関係を上線と下線で示す。

そして、おおまかに言うと前者がこの地域の西部に、後者が大阪市と京都市を含む東部に分布している。ただし、この地域差は2000年以降の生まれの世代では薄れてきており、前者に統一化されつつあるようだ。

この研究のきっかけは、近畿の中央部でもこの挨拶のメロディーに地域差がありそうだということに気づいたことである。上記の2つのメロディーがあることは知っていたが、以前はそれを世代差だと考えていた。筆者は近隣の諸方言との関係において大阪方言の位置づけを再考するという観点からこのメロディーの分布状況をはつきりさせておきたいとまず考えた。同時に、幼稚園等でしかほとんど使うことがない言い方がなぜこのような形で分布しているのか、どのような形で伝播したのかに興味を持った。そして調査を進めるなかで、現在は全国的にメ

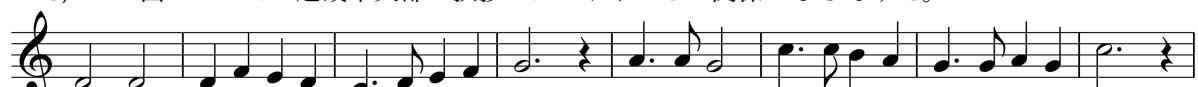
もし今問題としている挨拶がこの歌の歌詞を受けてできたものならば、このふたつをセットにした挨拶もおそらく戦後からということになるだろう。逆に、挨拶の存在を前提として作られた歌であるならば、挨拶はもっと古くから行われていたということになる。

なお、この歌では「さよなら」部分の高低は下に示す譜面（該当部のみ）のように〔サ|ヨ|チ|ヲ〕の形になっている。これは一般的な挨拶ことばとしての「さよなら」の当時の京都式メロディー、つまり作曲者の出身地の方言のものと一致する。しかし、歌詞の他の部分は京都式の高低とほとんど一致しないので、「さよなら」部分の高低と作曲者が京都市生育であることにはおそらく関係がないものと思われる。



せんせい さよなら またまたあした
みなさん さよなら またまたあした

このほか、高すすむ氏の作詞で渡辺茂氏が作曲した『さよならのうた』もある。こちらにも「先生さよなら」と「みなさんさよなら」の歌詞がはいっている。ただ、1912年生まれという渡辺氏の業績について考察した島崎篤子(2016)にはこの曲のことは取りあげられておらず、作曲年代は確認できていない。ただ、この曲については近畿中央部の挨拶のメロディーとの関係はなさそうだ。



せんせい さよなら さようなら みなさん さよなら さようなら
(またあした) (またあした)

ロディーの画一化傾向があるのではないかということに思いいたった。現時点では「なぜ」「どのように」に対する十分な答えは得られていないが、本稿ではおおむね 1950 年から 1975 年までの生まれの人を対象にこの挨拶のメロディーを調査した結果を報告し、「さようなら」部分の地域差の成立経緯について暫定的な考察をおこなった結果を記す。最後に、現在進行中と思われる全国的なメロディーの画一化傾向についても触れる。

ここで“メロディー”という言いかたをするのは、問題とする「さようなら」の高さの動きは、単語としてのアクセントに、挨拶や詠唱としてのイントネーションが加わったものと思われるので、両者をあわせた高さの動きを指すことばとしてふさわしいと考えたためである。

なお、幼稚園等の外での別れの挨拶として「さようなら」系の言い方をする場合は、近畿中央部では「さいなら」あるいは「さよなら」の形が多いと思われる。

2 先行研究

幼稚園等での詠唱的な挨拶についての先行研究は管見にはいらなかつたが、日常的な別れの挨拶としての「さようなら」に相当することばの語形とそのメロディーについて平山輝男他(編)『現代日本語方言大辞典』の「さようなら」の項に明治末・大正生まれの人の言い方の記述がある。

そこでは、沖縄県とその他の数地点で「さようなら」にあたる語がないとされている。そして「さようなら」にあたる言いかたは新しいとの注釈がついている地点（青森市、仙台市、富山县上平村〔南砺市〕、静岡市、鹿児島県上甑村）がある。また、アンバエ（盛岡市、秋田市）やアンバー（鹿児島県上甑村）という「さらば」に由来するとされる言い方²、そして「それじや」にあたると思われる言いかたが報告されている地点もある。「無型アクセント地点」と「アクセントの型の確定が困難な地点」には高さの動きは記載されていない。

この辞典において語形として「さようなら」系のものが主な使用形式としてとりあげられていてメロディーも記載されている地点について、そのメロディーを高低 2 段階の組み合わせパターンごとに筆者が記号化して地図化したものを図 1 に示す。

2 『日本国語大辞典 第二版』の「あばよ」の項の冒頭に「さらばをまねた幼児語あば、あばあばの『あば』に終助詞「よ」が付いたもの」との説明があり、「発音〈なまり〉」として、アバ・アバエ・アバエモ・アバヤ〔岐阜〕 アバー・アバエア・アバヤ〔岩手〕 アバエ〔岩手・新潟頸城・愛知〕 アンバ・アンバー・アンバエ・アンバヤ〔秋田〕 アンバヨ〔秋田・信州読本〕が掲載されている。

これに対し小林多計士(1991)は「あばよ」の語源について「あんばい(塩梅)よく」との説を出している。『日本国語大辞典 第二版』の「あんばい」の項にも「発音〈なまり〉」として、アンバ・エンバ〔飛騨〕 アンビア〔島根〕 アンベ〔栃木・埼玉方言・島根・長崎・鹿児島方言〕 アンバー〔長崎〕 アンベアー〔静岡〕 エンバイ〔八丈島〕 ヤンバイ〔静岡・福井・島根〕 ヤンバエ〔鳥取〕 ヤンベ〔NHK(栃木)〕が掲載されている。

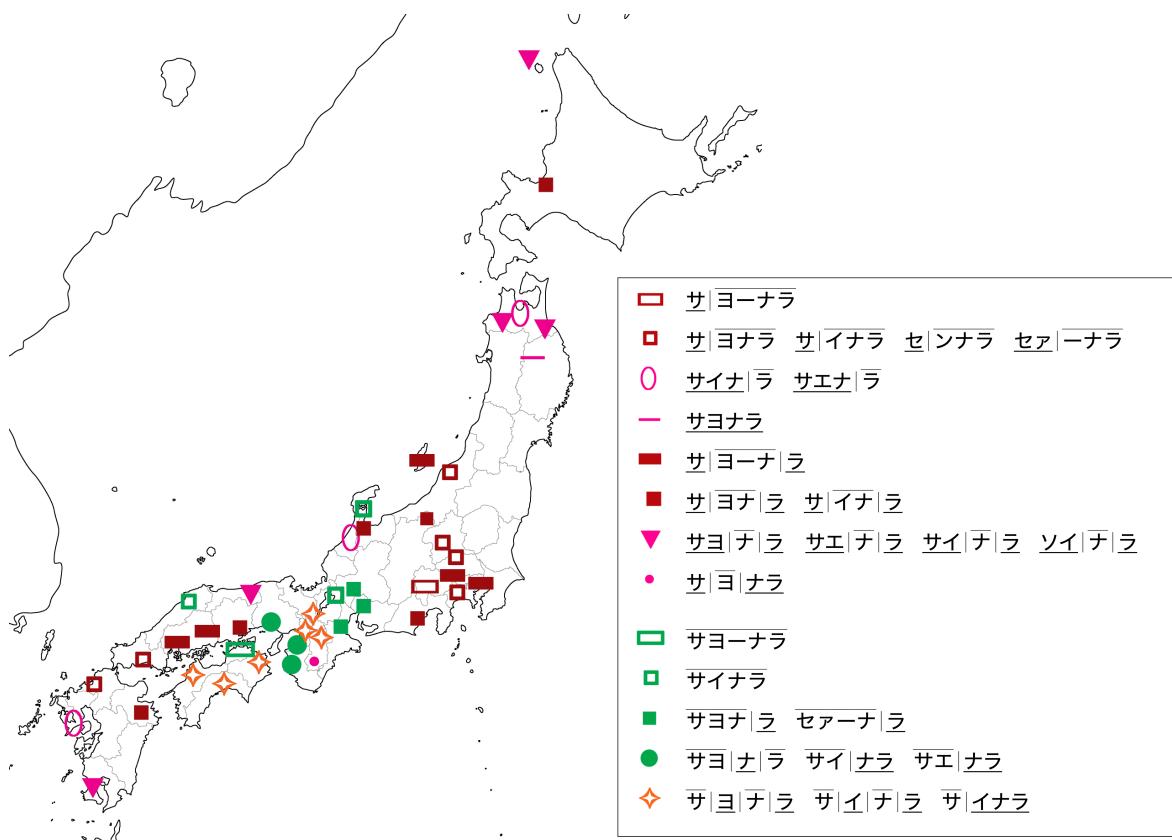


図1 『現代日本語方言大辞典』に記載された明治末・大正生まれの人の
「さようなら」相当語のメロディー

この地図で近畿の京阪式アクセント圏の状況を見ると、「さようなら」にあたる言いかたのメロディーに、イントネーションと思われる後半の動きをのぞき、冒頭2拍が高いタイプ（記号●）と、冒頭1拍が高いタイプ（記号◆）がおもにあり、おおまかに言って前者がこの地域の西部、後者が東部に分布していることがわかる。つまり、現在と同様の地域差がこの辞典の話者の世代からあったわけだ。「さよう」部分が[サヨー]と長い例は全国的にすくないが、この地域では短い言いかたばかりになっている。

具体的な語形と高さの動きは、冒頭の2拍が高いタイプは岸和田市の[サヨ|ナ|ラ]、加古川市の[サイ|ナラ]³、有田市の[サエ|ナラ]、そして冒頭1拍が高いタイプは京都市と大阪市の

3 この辞典の第3巻、p.2177に加古川市の言いかたは サイナラ [sainara] と記載されている。カナ表示の語形の冒頭は無記号なので高起式アクセントを意味するはずだが、音声記号は低起式であるかのようになっている。同辞典の索引巻にある地点別の項目一覧でもカナ表示の語形の冒頭は無記号であること、そして他の京阪系アクセントの地点の状況および現在の東播地区の状況を考えると、明治末・大正生まれの話者も高起式ではないかと思われる所以で、第3巻の音声記号は [sainara] の誤植と判断した。

[サ|イ|ナ|ラ] と大和郡山市の [サ|イナラ] になる。岸和田市 ([サヨ|ナ|ラ]) の補足説明に、サイナラと言うと（筆者注：つまり、京都市と大阪市のような [サ|イ|ナ|ラ]) 「ふざけた感じがする」と記されている。これは2つのメロディーの分布の成立経緯を考える上で注目される。

京都市、大阪市では [ナ] が高くなっている。これは、感謝の挨拶「おおきに」が大阪では本来のアクセント [オ|一キニ] に対して [オ|二|キ|ニ]（京都ではさらに [オ一|キ|ニ]) と言うことが多いのとおなじ現象で、別れなり感謝の気持を強調するためのイントネーションだと思われる。岸和田市で最後の [ラ] が高いのも別れの気持を強調するためだろうが、ここでは終了感を出すための強調型上昇調の末尾イントネーションをつけている⁴。こうした言いかたはリズムをつけることで挨拶を詠唱的なものにする役にも立っていると思われる。

三重県安濃町（現在は津市）は他の京阪式アクセントの地点とは異なり [サヨナ|ラ] である。これは別れの気持ちを強調するために「なら」の [ナ] を高くし、それを岸和田市などとおなじ [サヨ|ナラ] につけたものではないかと考えうるが、メロディーとしては岐阜市、名古屋市の [セアーナ|ラ] [sæ:nara] とおなじになっている（記号■）。つまり形の上ではアクセント体系の違いを越えてひとつのメロディーが中京圏とその近辺に分布していたことになる。

なお、四国の京阪式アクセント地域（徳島市、松山市、高知市）にも冒頭1拍が高いタイプがあるが、その語形はこの辞典に記された近畿地方のものとは異なり [サ|ヨ|ナ|ラ]、つまり2拍目が [イ] ではなく [ヨ] である。これについて第4節であらためて検討する。

4 強調型上昇調については郡 (2020, p.150f) 参照。東京式の言いかたで「その子に桃太郎という名をつけました」を [ソ|ア|コニ モ|モ|タロート ユー ナ|オツケマ|シ|タ] とすることがあるように、文末や節末を一段上げる発音。

このように、挨拶ではそのことば本来のアクセントの上に何らかのイントネーションをかけて言うことがなかば固定化していることがある。近畿の京阪式アクセント地域では、本文にあげた [サ|イ|ナ|ラ]、 [オ|二|キ|ニ] のほか、共通語式の言いかただが「こんにちは」を [ユ|ン|ニチ|ワ]、「ただいま」を [タ|ダ|イ|マ] と最後を高くする例がある。「ありがとう」は実際の感謝場面では本来の [アリガ|ト一] ではなく [アリガ|ト|二] と言うのが今はふつうだが、これは感謝の気持を強調した言いかたと思われ、強調するときにたとえば「冷たい」「全部」「大丈夫？」を本来の [ツメ|タイ] [ゼ|ンブ] [ダイジョ|二ブ] ではなく [ツメ|タ|イ] [ゼ|ン|ブ] [ダイ|ジョ|一ブ] と、低起式にして高さの山を後ろにずらせて言うことがあるのと同様の現象。

挨拶のメロディーが本来のアクセントとすこし違うというのは、東京の「さようなら」「こんにちは」「ただいま」でもおなじ。ことば本来の [サ|ヨーナ|ラ] [コ|ンニチワ] [タ|ダ|イマ] ではなく、 [サ|ヨーナラ] [ユ|ンニチワ] [タ|ダイマ] が今はふつうのようだ。東京の場合はこのように平板化させて呼びかけるようにする言いかたが目立つ。アクセント辞典にも両型が掲載されている。図1でも「なら」を [ナ] の後で下げる場合と平らにする場合の両方が、首都圏とその周辺の東京式アクセント地域に見られる。

3 近畿地方の京阪式アクセント圏における幼稚園等での「さようなら」

3.1 調査

大阪府を中心とした近畿地方中央部の生育で、現在も近畿地方中央部に暮らすおおむね1950年から1975年までの生まれの人を対象に⁵、自分が通った幼稚園等で一日の最後に声をそろえて言う挨拶の言い方はどんなものだったかを答えていただく調査を実施した。1975年以前の生まれに限定したのは、被調査者を集めやすかったということもあるが、後述するよう若い世代ではメロディーが違う事例を知っていたためである。調査は2023年から2025年にかけておこなった。

参考のために収集した京阪式アクセント地域ではない京都府北部と兵庫県北部の9名（男性1、女性8）を除き、京阪式アクセント地域の96名（男性30、女性66）から回答を得た。少数の例外以外、調査は対面でおこなった⁶。滋賀県と京都市の一部については松丸真大さんに助けていただいた。被調査者のみなさんに感謝する。

3.2 「さようなら」にあたる部分の語形とメロディーの実態

得られた回答から「さようなら」にあたる部分の語形とメロディーを先と同様の形で地図化したものを見図2に示す。この地図では、被調査者が通った幼稚園等の場所を聞くことができた場合はその所在地に、聞けていない場合は幼稚園時代の居住市町村（“平成の大合併”前）の役所・役場の所在地に記号をつけた。被調査者の性別、幼稚園と保育所の区別はしていない。

図2で左上の地域、太い破線の上にあたる兵庫県の北部と京都府の北部は非京阪式アクセント地域である。この地域を除く京阪式アクセント地域では「さようなら」のメロディーに以下のⓐⓑⓒ3系統がある。

- ⓐ [サヨー|ナ|ラ] (記号○) または [サヨー|ナラ] (記号○), あるいは [サヨ|ナ|ラ] (記号●)
[サヨー] または [サヨ] まで高いタイプ。兵庫県の南部海岸地域と最東南部、そして大阪府の和泉地域と和歌山県の紀北地域に分布する。最後の[ラ]が低い言い方はごくすくなく、

⁵ 伊藤敏行(1966)のまとめと中央教育審議会・初等中等教育分科会の資料(www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/008/siryo/03110701/006/002.pdf)によれば、1950年までは幼稚園就園率が1割以下だったところ、1960年で約3割、1965年で約4割、1975年でピークの約65%に達する（保育所はのぞく）。保育所は1960年で1割強、1965年で約15%、1975年で2割強である。本調査の被調査者は就園率が急速に増えていった時代に幼少期を過ごした世代になる。

⁶ 女性の被調査者は質問に即答することが多かった（自分の子供が通った幼稚園等で再認識した場合でなくとも）。そのなかには、お辞儀もまじえて答える人や、その前に歌う歌まで披露してくれる人もいた。一方、男性の場合は、幼稚園には通っていて、そういう挨拶をしたことまでは覚えていても、メロディーは覚えていないと言う人がすくなくなく、選択肢を提示して答えを誘導した場合もある。誘導しても思い出せない男性もいた。被調査者に男性がすくないことにはそのような理由もある。

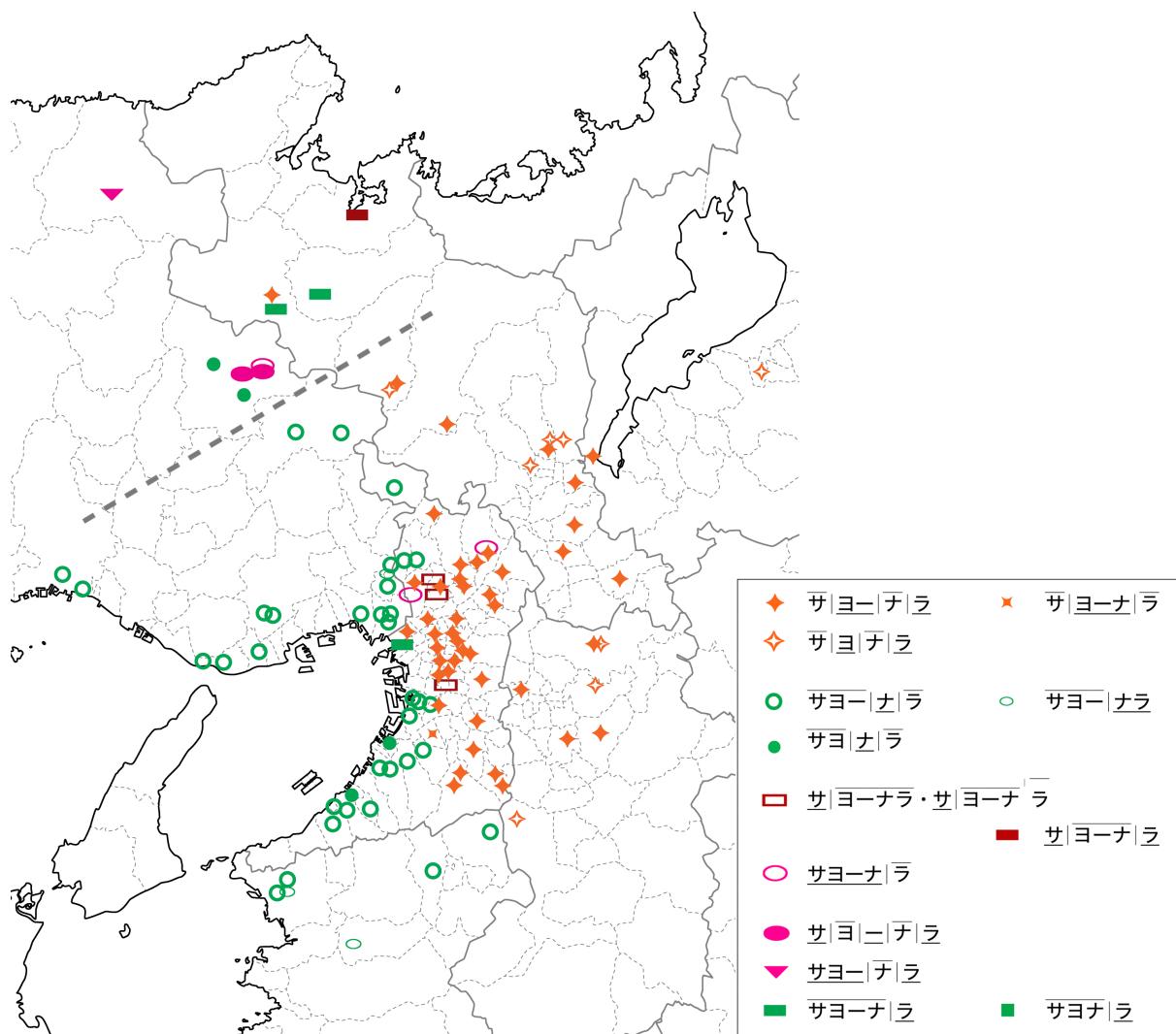


図2 おもに 1950 年から 1975 年までの生まれの人による幼稚園等での詠唱的な別れの挨拶における「さようなら」のメロディー：近畿中央部の状況

和歌山県野上町、和歌山市、川西市、箕面市の各 1 名。[ラ] を高くするのは、第 2 節でも述べたように「さようなら」の終了感を出すため強調型上昇調の末尾イントネーションで、詠唱として声をそろえるためのリズムをつくる役にも立つものと思われる。したがって、この両者は単なる変種と考える。[ヨ] が短い [サヨ|ナ|ラ] は和泉地域にわずかにあるだけだが、これも変種と考える。

⑤ [サ|ヨー|ナ|ラ] (記号◆) または [サ|ヨ|ナ|ラ] (記号◆)

[ヨ] で下げるタイプ。おおむね京都府の山城地域と丹波地域の南部、奈良県北部、大阪府の摂津・河内地域に分布する。[ヨ] が短い [サ|ヨ|ナ|ラ] は京都府、奈良県、滋賀県に相当数があるが大阪府には 1 名のみ。分布の状況には特徴があるが、とりあえずは [ヨ] の長

短は変種と考えておく。[ナ]が高いのも詠唱として声をそろえるためのリズムと思われる。

[ナ]ではなく[ラ]を高く言う人が堺市中区に1名あったが、これも変種と考える（記号★）。④の[ラ]が高い地域に隣接する地点なので、混交形かもしれない。

④ [サ|ヨーナラ] [サ|ヨーナ|ラ]（記号□）・[サヨーナ|ラ]（記号○）

下がり目がないタイプ。大阪市と大阪府の北摂地域に散見される。詳細は以下に述べるが、前2者は東京式をそのまま取りいれた言い方で、最後のものはそれを大阪風にアレンジした変種かと思われる。[サ|ヨーナラ]は大阪市の1例のみで、最後の[ラ]でさらに一段高くしたものは北摂の2例。このように[ラ]でさらに一段高くする言いかたは東京にあるが、これも④の[ラ]の高めと同様、強調型上昇調の末尾イントネーションをつけたものだろう。

④としてまとめたもののうち[サ|ヨーナ|ラ]と[サヨーナ|ラ]はおなじ地域に分布している。前者は東京式そのままだが、後者もそれを京阪式にアレンジして取り入れたものだろうと思われる。この地域は近畿以外からの転入者が以前から多かったところなので、東京式のメロディーを転入児あるいは他地域出身の教員がもたらし、この挨拶全体の中で唯一非日常的な言いかたである「さようなら」の部分について、他の子どもや教員がそのままの形で、あるいは京阪式アクセントのフィルターをとおした形で受け入れたのだろう。

この言いかたをする人でも「先生」と「みなさん」の部分は京阪式的なメロディーであり、挨拶全体が東京式というわけではない。該当する被回答者はたまたま筆者の個人的知り合いだが、みな地元の生まれで、日常的に京阪式アクセントを使っている。

後者のメロディーが京阪式アクセントとして低起式になったのは、最後の[ラ]をきわだたせることで終了感を出し、詠唱として声をそろえるためのリズムをつくるのに便利だったためではないだろうか。[ラ]を高く言うには、前者の[サ|ヨーナ|ラ]のように直前が高いままよりも、直前を低くおさえる方が楽だろう⁷。ならば、京阪式アクセントとしては低起式にすればよいことになる。

なお、「さようなら」が④のいずれであっても、「先生」は多くの場合[セ|ンセー]または[セ|ン|セ|一]（和泉地域と紀北地域にはeiが融合しない[センセイ]もあり）、そして「みなさん」は多くの場合[ミ|ナサン]または[ミ|ナ|サ|ン]だった。大阪や京都の京阪式アクセントとしてはそれぞれ[セ|ンセー][ミ|ナサン]である。したがって、3拍目が高いのは何らかのイントネーションの付加ということになる。これも声をそろえる挨拶としてリズムをつくる

7 最後の[ラ]を高くし、その前を低くすることで詠唱としてリズムをつけるということは、第5節で見るようなこの詠唱の最新の動向にも実は見られるのではないかと思われる。

ためのものと思われる。

このほか、「先生」を〔センセ〕二と言ふ人が紀北に多くあり、泉南にも散見される。これは、中井(2002b)に（近畿の）周辺部のアクセントとして掲載されている形にあたる。東京式アクセントの使用というわけではなさそうだ。

3.3 ④系と⑤系のメロディーの分布のありかた

今述べたように④系のメロディーが移住者を通じて東京式の言い方を取りいれたものだとすれば⁸、問題になるのは④系と⑤系の分布状況である。

図2を見ると、その分布のありかたは現在の府県単位の行政区画と律令制の区画の両方がかかわる形になっている。具体的には、摂津国にあたる地域でも大阪府（大阪市と府北部）と兵庫県（県東南部）でメロディーが違う一方で⁹、大阪府でも摂津国・河内国・和泉国の地域では異なる。堺市でも河内地域と和泉地域とで異なる。被調査者の世代では、和泉地域の北部（泉北）の平野部は方言として摂津地域とほとんど変わりがなかったところなのに、「さようなら」のメロディーは摂津と違い、泉南とおなじになっている点が注目される。

そして、この分布は第2節で見た明治末・大正生まれの人の〔サヨナラ〕〔サイナラ〕のメロディーの分布と一致している。つまり、今回の調査対象である昭和の戦後生まれの人が覚えていた幼稚園等での詠唱的な別れの挨拶では、「さようなら」にあたる部分のメロディーはその1~2世代上のメロディーを活かしたものだと言うことになる。

ところで、この詠唱的挨拶はほぼ幼稚園等でしか使わないものである。したがって、そのメロディーは基本的に被調査者の幼少時代の担当教員や保母（「保育士」の旧称）の言い方を反映したものだろうと思われる。そして、その教員や保母自身も、自分の幼稚園等の時代にその担当教員や保母から習ったものだろうと想像される。また、教員や保母の多くは地元の出身だったと思われる。そうした閉じた世界の中でメロディーが変わることがあるとすれば、他地域からの転入児がもたらした言いかたが流行するか、他地域出身の教員や保母が導入したものが広がるか、あるいは教員や保母の養成機関や研修の場で別のメロディーを覚えたものが広がるという可能性が考えられよう。

3.4 「さようなら」「さよなら」「さいなら」は近畿中央部でいつから使われているか

挨拶としての「さようなら」は「さようならば」が変化したものとされる。つまり、「さよう」

8 ④系は④系と⑤系の接触地帯に多い。接触地帯であることとも、そのどちらでもない中立的な東京式を使う要因になったかもしれない。

9 厳密には、⑤系が大阪側にすこしきこんだ形になっている。

(然様・左様)に助動詞「なり」の未然形「なら」と接続助詞「ば」を接続させた言いかたから来ているということになる。『日本国語大辞典 第二版』の「さようなら」の項には、語誌として「先ず『ごきげんよう』『のちほど』などの他の別れの表現と結びついた形で用いられ、次いで近世後期に独立した別れのことばとして一般化した」という説明がある。

ただ、第2節で見たように近畿中央部の明治末・大正生まれの人のふだんの言い方は、短い「さいなら」か「さよなら」だった。それはその下の世代も同様である。

前田勇(1965)の「さよなら」の項に「単独形『さやうなら』『さよなら』は、文化・文政期から見えはじめる」とある。「さいなら」はこのふたつに比べてずっと新しい言いかたのようで、同書のその項には用例として大阪市保育会(編)(1903)に記されたものが示されている。

この書は「幼児の野卑なる言語を訂正せんとする目的」で幼稚園における幼児の言語を調べようとしたもので、「訛言」「方言」「片言」「小児語」「鄙語」「誤謬」に項目分けされているうち「訛言」のところに「さいなら」があり、「正語」として「さやうなら」と書かれている。これは「座布団」に対する「だぶとん」とおなじ扱いなので「さいなら」は「さようなら」が訛った正しくない言いかただと大阪市保育会は理解していたことになる。また前田氏も「さいなら」は「サヨナラの訛(jo>j, i)」だとしている。

木村恭造(2004)も「さいなら」について「サヨナラの訛」、「明治の後期になってサイナラとなつたと思われる」とし、用例として1893年と1900年の雑俳をあげている。

たしかに近畿地方では発音基底として一般に発音のしかたがゆるく、口をあまり動かさず、できるだけ楽に言おうとする傾向があり、そのために母音も子音も音が崩れる形で変化することがよくある。その一環として〔サヨーナラ〕が〔サエナラ〕のような音を経て〔サイナラ〕になることは考えうる。図1の有田市や加古川市の言いかたはそれかもしれない。しかし、筆者は京都市と大阪市については「さいなら」は「さよなら」の単なる訛ではなく、「さようなら」または「さよなら」と「さいな」との混交形ではないかと考える。その詳細は第3.8節で述べる。

3.5 [サヨ (ー)]まで高いⓐ系と [サ] の直後で下がるⓑ系のメロディーの由来

「さようなら」を「さよう」と「なら」に分けて考えると、「さよう」部分のアクセントは明治後期以降生まれの人は大阪でも京都でも〔サヨー〕、つまり高起式無核である¹⁰。そして「なら」のアクセントは低接である。すると、「さようなら」のメロディーはすくなとも明治後期以降は〔サヨー|ナラ〕だということになる。これは先に整理したⓐのタイプにあたる。最後の

10 杉藤美代子(1996)、中井幸比古(2002b:CD-ROM)。この語は短く〔サヨ〕あるいは終助詞をつけた〔サヨカ〕の形で昭和の初期の生まれの世代まで応答表現としてさかんに使われていた。

[ラ]を高くする発音は第2節(岸和田市)で述べたようなイントネーションの付加と考える。

そうすると、大阪の摂津・河内、そして京都、奈良にある⑥のタイプ、つまり [サ|ヨー|チ|ラ] や [サ|ヨ|チ|ラ] はこのことばの本来のメロディーではないことになる。

3.6 アクセント辞典等に記載された「さようなら」相当語のメロディー

大阪市と京都市における「さようなら」相当語の明治期以降のメロディーは先行研究から知ることができる。

3.6.1 大阪市

まず、大阪市について杉藤美代子(1996)を見ると、1916年から1932年生まれの話者3名のうち、「さいなら」については1名(生年:1932)は⑥系にあたる [サ|ヨ|チ|ラ] と④系の [サヨ|チ|ラ]との併用、1名(1923)は⑥系にあたる [サ|ヨ|チ|ラ]、1名(1916)は④系にあたる [サヨ|ナラ]。一方、「さようなら」については⑥系にあたる [サ|ヨー|チ|ラ] が1名(1932)、④系にあたる [サヨー|ナラ] が2名(1923, 1916)となっている。「さいなら」は方言形なので記載がない。

これらは幼稚園等の挨拶という形で調査されたものではないだろうが、幼稚園自体はこの話者の方々の幼少時代にはあった。むしろ、“大大阪”の時代の市中心部出身の方々なので、幼稚園に通っていた可能性は低くないと思う。

杉藤氏の辞典では、「さよなら」でも「さようなら」でも、もっとも年長の1916年生まれの話者には⑥系は出てこない。これは、⑥系が大阪では大正後期か昭和初期あたりからの新しい言い方であることを示すものと思われる。

また、牧村史陽(1955)には、「さいなら」について [サイ|ナラ] [サ|イナラ] の2形がこの順で記されている(同氏は1898年生まれだが、自身の言いかただけを掲載したものかどうかは不明)。

金沢裕之・中井幸比古(編)(1998)にある明治期の大坂落語の聞き取り資料では、幕末から明治初頭の生まれの落語家のうち3名(二代目染丸、四代目松鶴、二代目曾呂利新左衛門)には短い形での④系にあたる [サヨ|ナラ] が多いが、やはり④系にあたる [サイ|ナラ] のほか、④⑥どちらでもない [サヨナラ] [サヨナ|ラ] も1例ずつある。演者は幕末から明治初頭の生まれだが、二代目染丸氏は堺市生まれとのこと。ここには [サ] の直後で下げる⑥系にあたる言いかたは出てきていません。長い [サヨーナラ] もない。

以上から、大阪市では幕末から明治初頭の生まれの人は [サ] の直後で下げない④系にあたる言い方だったが、遅くとも大正から昭和初期の生まれの人には [サ] の直後で下げる⑥系の言い方が④系と併用の形で出てきているということになる。

3.6.2 京都市

京都市については、中井幸比古（2002a）に、挨拶としての「さよなら」に〔サヨナラ〕と〔サ|ヨ|ナ|ラ〕のアクセントが付されている。中井（2002b: CD-ROM）にある1898年から1934年生まれの京都市の10名の状況を見ると、挨拶としての「さよなら」は全員が⑥系にあたる〔サ|ヨ|ナ|ラ〕。ただし、注釈として「挨拶としては、全員サ+ナラ1+1が本来。〈筆〉挨拶では、『さいなら、さよなら』ともに、少ないが3, L0でも言うか。なお、敬意の高い会話では『さよなら、さいなら』は使わない」とある。つまり、〔サ|イ|ナ|ラ〕がこの全員の本来の言いかただが、1957年生まれの中井氏自身は〔サイナ|ラ〕〔サイナ|ヲ〕のメロディーでも言えそうだということだろう。そして「さいなら」の項を見ると〔サ|イ|ナ|ラ〕の他に〔サイナ|ラ〕〔サイナ|ヲ〕とも言う人があることがわかる。

一方、挨拶としての「さようなら」については、中井（2002b:CD-ROM）では10名全員に⑥系にあたる〔サ|ヨー|ナ|ラ〕があり、話者によって〔サヨーナ|ラ〕〔サヨーナラ〕と併用になっている。

以上から、京都市では〔サ〕の直後で下がる⑥系にあたるメロディーは遅くとも明治後期の生まれの人にはすでに定着していたことがうかがえる。④系にあたるメロディーは中井氏の資料には出てこない。

3.7 [サヨ（一）]まで高い④系と〔サ〕の直後で下がる⑥系の新旧関係

以上の情報と第2節で見た明治末から大正生まれの人の言い方を考え合わせると、大阪市・京都市では「さようなら」系の挨拶の語形としては「さいなら」が普通だったこと、そしてメロディーについては「さようなら」を含め京都市では遅くとも明治後期の生まれの人からは〔サ〕の直後で下がる⑥系になっているのに対し、大阪市ではそれより1世代下でも〔サヨ（一）〕まで高い④系が⑥系と共に存していることがわかる。ところが、第2節で見たように、近畿の京阪式アクセント圏のやや周辺部にあたる岸和田市、加古川市、有田市では、明治末から大正生まれの人に⑥系にあたるメロディーは出てこない。

つまり、〔サ〕の直後で下がる⑥系メロディーの使用は京都市が早く、大阪市では大正期か昭和初期になってから使われはじめた新しいメロディーということになる。おそらく京都から入ってきたのだろう。第2節で見たように明治末から大正生まれの世代では奈良県の大和郡山市も⑥系だが、これも一般的の方言事象と同様、京都から伝わったと考えるのが妥当かと思われる。

しかし、大阪でも和泉地域にある岸和田市や兵庫県の加古川市には⑥系は伝わっていない。岸和田市の補足説明にあった⑥系の〔サ|イ|ナ|ラ〕は「ふざけた感じがする」というのは、この言い方がなじみのないもので、語源意識に反することを示すものなのだろう。

3.8 [サ] の直後で下がる⑤系メロディーの成立経緯

第3.5節で述べたように、語源から考えると「さようなら」のメロディーは本来 [サヨー]|ナラ，つまり④系になる。では、そこになぜ [サ] の直後で下げる⑤系のメロディーが生まれたのだろうか。④系からの自然な音変化として⑤系が生じるとは考えにくい。

ここでは、京都市や大阪市の⑤系の成立の理由として、2拍目が [イ] であることに注目して、間投表現としてかつてよく使われた「さいな」（そうですよ、そのとおり）ということばの影響を考えたい。

「さいな」は『日本国語大辞典 第二版』に淨瑠璃『平仮名盛衰記』(1739)，淨瑠璃『仮名手本忠臣蔵』(1748)，滑稽本『浮世風呂』(1809~13) の用例があがっているので、「さようなら」「さよなら」よりも古い言いかたになる。

これは「さい」と終助詞「な」に分解できそうに思える。『日本国語大辞典』では「さい」を「さよう」の変化した語という説明をつけた上で、「ぞんざいな語形で、『さいざんす』『さいです』『さいでございます』などの連語を作る」と説明している。

牧村(1955)は「さいな」について、「サイナラのサイと同じ」と言い、「軽い語調で発音することは、最近ラジオで、アチャコの口癖としてよく耳にする通りである」と書いている。このアチャコとは1897年の生まれで大阪育ちの漫才師・コメディアンである花菱アチャコ氏のこと。また、大阪では「さようです」の意味で「さいだす」「さいでおます」(アクセントはすべて高起式無核)とも言ったが、そのことも同書で確認できる。

別の語源説として、前田(1965)は「さいな」について「『然りな』のイ音便か」としている。同書には続けて「近世上方語では、目上・目下にかかわらず親密な相手に対しては『さいな』『さいなあ』、同輩以下に対しては『さい』『さいの』『さいのう』『さいやい』といっている」とあるので、「さい」が独立性を持った間投表現になっていたことがわかる。

語源がいずれであるにせよ、「さい」が使われる上記の例はすべて「さよう」ないし「さようじや」で置き換えることができるから、「さい」と「さよう」が意味として非常に近いのは確かだ。したがって「さようなら」または「さよなら」が、「さいな」または「さい」と混じり合つて「さいなら」ができたということが十分ありそうに思われる。

ところで、「さいな」のメロディーは [サ|イナ] である¹¹。[ナ] が低いのは、「さいな」の反対語とも言える「いいえ、そうではない」の意の古い言いかた [イー|エ|一ナ]¹²の [ナ] でもおなじだ。後者の [ナ] は、その前が長く低いことから、これは古い終助詞「い」に「な」が

11 牧村(1955), 中井 (2002b:CD-ROM)。

12 牧村(1955), 中井 (2002a)。

組み合わさった複合終助詞「いな」が「いいえ」についての言い方だということが考えられる(つまり [イーエイナ] → [イーエーナ])。これは現在でも「見て」に対する「見てよ」にあたる言いかたが [ミテ|一ナ] (つまり [ミティナ] → [ミテーナ]) となるのとおなじではないだろうか。すると、「さいな」も「さい」に「いな」をつけ、間投表現として短く言ったものだということを考えられる。そのことで「さいな」のメロディーがうまく説明できる(つまり [サイ|イナ] → [サ|イナ])。

もし「さいなら」が「さいな」と「さよ(う)なら」と混じり合った結果できたものだとすれば、そのメロディーは「さよ(う)なら」のものを使う可能性もある。しかし、「さいな」を強く意識すれば [サ|イナラ] になるだろう。その上で、別れの意味を強調し、同時に挨拶としてリズムをつけるために [ナ] を高くすると [サ|イ|ナ|ヲ] になる。

先に図1で見た明治末・大正生まれの人の日常的な別れの挨拶で、近畿中央部で [サ] の直後で下がる⑥系のメロディーの地点は、どこも語形は [イ] を使った [サ|イ|ナ|ヲ] であることもこの説明の傍証になるだろう。

いったん [サ|イナラ] や [サ|イ|ナ|ヲ] という言いかたが日常的な言いかたとして定着したならば、日常的ではない「さようなら」という言いかたを幼稚園等で求められる場合にも、日常的なメロディーを当てはめるということをするだろう。そうすると [サ|ヨーナラ] や [サ|ヨー|ナ|ヲ] になる。それを短くしたのが [サ|ヨナラ] [サ|ヨ|ナ|ヲ] ということではないだろうか。本稿で問題としている幼稚園等での挨拶の場合は、短い形を使うことで構成語が「先生」「さよなら」「みなさん」「さよなら」とすべて4拍でそろうことになり、詠唱らしさが増すという理由もあるかもしれない。

1901年生まれで京都市育ちの模垣実氏の記した資料にもとづく坂本清恵他(編)(1998)に「さよなら」のアクセントとして [サ|ヨ|ナ|ヲ] が記されているが、注記として「サイ・ナラのH1・H1からならん」とある。つまり「さよなら」のメロディーが「さよう」+「なら」という語源からは考えにくいものになっている理由として、模垣氏も [サ|イ|ナ|ヲ] からの転移を考えられたわけだ。

3.9 [サ] の直後で下がる⑥系メロディーのその後

ここまで見てきたように、「さようなら」相当語の新しい⑥系メロディーは明治後期には京都市に定着しており、それが大正期か昭和初期に京都市から大阪市に伝わっていったものと思われる。奈良県にも同時期に伝播したであろう。その状態を反映したのが図1の状況と思われる。

また、おそらくその同時期に大阪府の北摂地域や河内地域、そして奈良県北部や滋賀県の京

阪式アクセント地域もおなじ言いかたが伝わっていったであろう。その状態を反映したのが図2に見られる幼稚園等での挨拶における「さようなら」のメロディーの分布状況だと思われる。

ところが、やはり図2で確認したように、大阪府の和泉地域（泉北、泉南とも）や摂津地域の兵庫県側には❷系メロディーは伝わらず、そのまま現在に至っている。つまり、❷系は摂津・河内地域と和泉地域の境界を越えておらず、また、おなじ摂津地域でも大阪府と兵庫県の境を越えることもできていない。その理由として、京都市からの物理的距離がやはり大きいということと、大阪府と兵庫県では教育行政の区画として異なることがあるだろう。

4 四国の京阪式アクセント地域の明治末・大正生まれの人の [サ|ヨ|チ|ラ]

第2節でも触れたが、図1に見られる明治末・大正生まれの人の言いかたで近畿中央部のメロディーとの関係で注目されるのが、おなじ京阪式アクセントである四国の徳島市、松山市、高知市の状況である。ここは京都市や大阪市と同様の❷系メロディーをつけた[サ|ヨ|チ|ラ]になっている。

しかし、この徳島市、松山市、高知市の[サ|ヨ|チ|ラ]は、先に京都市や大阪市などについて想定したようなメロディーの成立過程をそのままあてはめることができない。つまり、京都市で[サヨー|ナラ]または[サヨ|ナラ]が間投表現[サ|イナ]と混じりあって[サ|イナラ]が生じ、それが20世紀の初頭にはほぼ定着していたが、大阪市への普及は1~2世代かかったこと、そして[ナ]が高いのはイントネーションであること、幼稚園の挨拶ではそのメロディーを「さようなら」にあてはめた[サ|ヨー|チ|ラ]が生じ、それを短くしたのが[サ|ヨ|チ|ラ]だというストーリーでは説明しにくい。

というのは、ひとつにはメロディーの点で兵庫県や大阪府南部などに[サヨ|ナラ]の地域があるので、京都の新しいメロディーがまんべんなく“地を這う”形で伝わったとは考えにくいくからであり、もうひとつには四国の三県の語形はどれも[ヨ]を使った[サヨナラ]であって京都市・大阪市などの[サイナラ]とは違うので、京都市・大阪市などの言いかたがそのまま“飛び火”したとは考えにくいくからである。したがって、四国がなぜ[サ|ヨ|チ|ラ]なのかについては別の成立経緯を考える必要がある。

可能性としてひとつ考えられるのは「さよう」のアクセントがこの地域では[サ|ヨー]だったのではないかということだ。実は、「さよう」のアクセントとして江戸時代前期の大坂に[サ|ヨー]があつたことが秋永一枝氏他（編）(1997)から知られる（近松淨瑠璃本）。このアクセントはその後大阪では廃れたが、明治末・大正生まれの四国の人々はこのアクセントだったかもしれない。

しかし、その当否を直接調べることは今となってはむずかしい。中井（2002b）と高田豊輝

(1985)から高知市と徳島市の昭和前半生まれの話者による「さようなら」系のアクセントはわかるが¹³、「さよう」単独のアクセントは記されていない。

5 現代の若年層の状況と全国的な画一化傾向

近畿の京阪式アクセント圏におけるⒶ系とⒷ系の分布状況はその後変わりつつある。おおむね2000年以降の生まれの人の幼稚園等での詠唱的な別れの挨拶のメロディーは、大阪市や北摂、河内地域ではもはやⒷ系ではなく、Ⓐ系の〔サヨー|ナ|ラ〕が多いようだ¹⁴。京都市にもその傾向が見られる。

これは京阪式として本来の形に戻っているように見える。しかし、実際はそうではなく、以下に述べるような全国的なメロディーの画一化の一環という可能性がある。

今は幼稚園等での生活を経営側が紹介する動画や保護者が撮影した動画がYouTubeなどWEBサイトにいくつも出ている。それを見ると、詠唱的挨拶の「さようなら」部分のメロディーとして東京式の〔サ|ヨーナ|ラ〕もあるが、近畿地方以外では全国的に〔サ|ヨー|ナ|ラ〕というメロディーが増えつつあるように思われる。

それを京阪式アクセントとして高起式にすると、先述のⒶ式の〔サヨー|ナ|ラ〕と結果的におなじものになる。そしてそれが最近までⒷ式であった大阪市や北摂、河内だけでなく、Ⓑ系の牙城である京都市まで広まりつつあるのではないかということが考えられる¹⁵。

動画では声をそろえて言っているためメロディーが聞き取りにくいものがすくなくなく、また複数のメロディーが混在するように聞かれるものがあるが、筆者が〔サ|ヨー|ナ|ラ〕かと聞いた例を、東日本の幼稚園または保育所と思われるものについて以下にいくつかあげる¹⁶。

13 中井(2002b:CD-ROM)に収められた『高知市方言ア小辞典』は1946年生まれ高知市育ちの話者のアクセントをまとめたもので、そこでは「さよなら」は〔サヨ|ナラ〕、「さようなら」は〔サ|ヨーナラ〕〔サ|ヨー|ナ|ラ〕の形になっている。同じく中井(2002b)にある1937年生まれ現在は徳島市になっている地域の育ちの話者のアクセントをまとめた『徳島市方言ア小辞典』では、「さよなら」は〔サヨ|ナラ〕〔サ|ヨ|ナ|ラ〕、「さようなら」は〔サ|ヨーナラ〕〔サ|ヨー|ナ|ラ〕になっている。『徳島市方言ア小辞典』の話者自身による高田豊輝(1985)には〔サ|イ|ナ|ラ〕(本文)と〔サ|ヨー|ナ|ラ〕(巻末補遺)の形が記されている。

14 摂津市の例(10分56秒あたり): <https://www.youtube.com/watch?v=8HruVSglcfo>

15 2024年時点では大阪府のいくつかの小学校では授業の開始時に日直が「はじめます」という声かけをするようになっていて、そのメロディーがこの今風の「さようなら」とおなじく〔ハジメ|マ|ス〕になっているということを複数の教員から聞いた。これは教育委員会レベルで決めている話ではないようで、転任してきた教員が驚くこともあるようだ。他地域の事情は調査できていないが、幼稚園や小学校では儀礼的な言いかたはこのメロディーで言うようになっているということかもしれない。

16 注14, 17のものも含め動画はすべて2025年5月22日に確認。最後の川口市のものは参考までに

「みなさん」の部分も京阪式に近いものがある。東日本をとりあげたのは、近畿出身の教員はあまりいないだろうこと、そして京阪式の伝統的なメロディーが園児の移動の結果として飛び火する可能性も相対的に小さいと思われるからである。

- ・埼玉県さいたま市（3分40秒あたり） https://www.youtube.com/watch?v=R-sDKom3_0s
- ・東京都中野区（20分37秒あたり） <https://www.youtube.com/watch?v=kvf3EdO45TI>
- ・長野県須坂市（0分46秒あたり） <https://www.youtube.com/watch?v=AiFYagQKSD4>
- ・仙台市か（最初から） <https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=9FzvW6-e42c>
- ・埼玉県川口市（3分6秒あたりから） https://www.youtube.com/watch?v=Uzp_c0gxUnw

現在は教員や保育士の養成機関で指導内容の統一化が以前より進んでいるだろうから、詠唱的な挨拶のメロディーが全国おなじものになっていてもおかしくはない。だが、なぜこのメロディーなのだろうか。あくまで可能性だが、それを説明しうるひとつの考え方を次に記してこの稿を終えることにする。

この新しいメロディーが東京でもおこなわれていることについては、他地域の言いかたを東京で受け入れたという可能性もあるが、それよりも東京式アクセントによる昔ながらのメロディーをもとにしながらも、それを一部変化させたという可能性をまず考えたい。

この挨拶は儀礼的な詠唱であり、みんなで声をそろえて言うものなので、リズムをつけることで声をあわせようとする力が働くことが考えやすい。おそらくそのために、そして同時に「さようなら」の終了感を出すために強調型上昇調の末尾イントネーションをつけることが以前から東京などにはあった¹⁷。

ただ、[サ|ヨーナ] という最後がすでに高いところにさらに強調型上昇調をつけるにはすこし労力が必要だ。それよりも最後の [ナ] の前を低くすれば発音のエネルギーがすくなくですむ。特に幼児にとっては都合がよいだろう。そこで直前の [ナ] を低くした言いかたとして [サ|ヨー|ナ|ラ] ができたのではないだろうか。すでに見てきたように、挨拶ではことば本来のアクセントからすこし逸脱することはある（この場合は聞いた印象が大きく変わるが）。

上に例としてあげた最後の川口市のものが [ヨーナ] の部分ですこしづつ下がる動きになっているのも、[ナ] の前を低くしておく手段のひとつと理解することができる。

この考え方には、京阪式アクセント地域の④タイプの変種 [サヨーナ|ラ] ができた理由として

あげた例で、[ヨーナ] の部分ですこしづつ下がる動きになっていて高低の2段階では書きあらわしにくいが、東京式アクセントでの言いかたには聞こえない。

17 浦和市の例（7分30秒あたり）：<https://www.youtube.com/watch?v=COKLGPL0OBg>

考えたこととおなじであるが、はたしてどうだろうか。

文献

- 秋永一枝他(編)(1997)『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版.
- 伊藤敏行(1966)「幼児数から見た幼稚園九〇年の変遷」『幼児の教育』(日本幼稚園協会) 65(5), 7-11.
- 大阪市保育会(編)(1903)『大阪のをさな言葉』大阪蔡倫社.
- 金沢裕之・中井幸比古(編) (1998)『初期落語 SP レコードの大坂アクセント—資料と分析—』岡山大学文学部对照日本語学研究室.
- 木村恭造(2004)『上方雜俳 京ことば辞典』洛西書院.
- 郡史郎(2000)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店.
- 小林多計士(1991)『ごきげんよう—挨拶ことばの起源と変遷—』MBC21.
- 坂本清恵他(編)(1998)『模垣京都アクセント基本語資料』アクセント史資料研究会.
- 島崎篤子(2016)「『たきび』の作曲者・渡辺茂の業績—作曲家と教師としての活動に焦点を当てて—」『教育学部紀要』(文教大学) 50, 103-120.
- 杉藤美代子(1996)『大阪・東京アクセント音声辞典』 CD-ROM.
- 高田豊輝(1985)『徳島の方言』高田豊輝.
- 戸倉ハル・天野蝶・一宮道子(1948)『うたとゆうぎ 秋の巻』二葉書店.
- 中井幸比古(2002a)『京都府方言辞典』和泉書院.
- 中井幸比古(2002b)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 長尾智絵(2017)「『きくこと』と『つくること』の相関を視座とする一宮道子の音楽教育実践—歴史的・音楽分析的手法による—」日本女子大学 2016 年度博士論文. <https://jwu.repo.nii.ac.jp/records/2922>
- 前田勇(1965)『上方語源辞典』東京堂出版.
- 牧村史陽(1955)『大阪方言事典』杉本書店.
- 文部省(1948)『保育要領—幼児教育の手びき—』<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s22k/index.htm>
- 文部省(1956)『幼稚園教育要領』<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s31k/chap2.htm>